

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和五十九年 一月十五日 発行 (毎月一回・十五日発行)

(通第四一四号)

次

63.9.21.

◎

病床雑記

.....

酒井演幽 (10)

求道と人生

.....

福島政雄 (6)

萬事信なきによりてわろきなり

近角常観 (1)

目

63.9.21

◎

慈光日誌抄

.....

西元宗助 (18)

青蓮華

.....

井上善右エ門 (15)

真宗聞きがたし

.....

佐々木徹真 (13)

明日への不滅の希望

.....

花田正夫 (21)

迷入をヨリニ對シテ?

慈

光

第三十六卷 第一号

萬事信なきによりてわろきなり

近 角 常 觀

「御一代聞書」に、
「萬事信なきによりてわろきなり。善知識のわろきと仰せらるるは、信のなきことをくせごとと仰せられ候事に候」(一八八)

とある。実に凱切極まる教訓である。総て人生の出来事は、信のあるか無しによりて正しきか、正しくないか極まる次第である。殊に「善知識のわろきと仰せらるるは、信のなきことをくせごとと仰せられ候事に候」と云える一言は、人生の肺腑を突きあてた仰せである。

全体「御一代聞書」には氣をつけて見ればたび／＼同一の教訓がある。

「信をとらぬによりてわろきぞ、ただ信をとれと仰せられ候。善知識のわろきと仰せられけるは、信のなきことをわろきと仰せらるるなり。然れば前々住上人、或人を言語道断わろきと仰せられ候ところにその人申され候。何事も御意のごとくと存候と申され候えば、仰せられ候。

分の水かけ論に過ぎぬ。唯早く信をとれ／＼である。

次の章にも、

「蓮如上人仰せられ候。何たることをきこしめしても、御心にはゆめ／＼かなわぬなり。一人たりとも信をとりたることをきこしめしたきと、御ひとりごとと仰せられ候。御一生は人に信をとらせたく思召し候由、仰せられ候と云々」(一八七)

実に蓮如上人の御一代は信の外にはない。信の外には何たる事も聞きたくないと思召せられるのである。如何なる事をしても上人の御心にはかなわぬのである。事業でもない、物質でもない。御一生は人に信を取らせたく思召すの外はなかったのである。

また、

「蓮如上人、御病中の時仰せられ候。御自身何事も思召しのことさることなしと。但御兄弟の中、そのほか誰にも、信のなきをかなしく思召候。世間にはよみぢの障り、ということあり、我においては往生すともそれなし。ただ信のなき事、これを歎き思召候由、仰せられ候いき」(二二一)

この「御一代記聞書」をつゞ／＼拝見して、上人が如何にも信に力を入れさせられたことを今更の如く思う次第である。「聖人一流の御勸化のおもむきは、信心をもて本とせら

ふつとわろきなり、信のなきはわろくはなきかと仰せられ候と云々」(一八六)

実に何が悪きといつても信のなきこと程悪きことはない。「何事も御意のごとくと存候」と、一々律法的に服従実行したりと云えばとて、若し信がなかったならば、魂の抜けた人間も同然である。「ふつとわろきなり、信のなきはわろくはなきか」とは、如何にも痛快なる鉄案ではないか。

而もこれらの教訓には「善知識のわろきと仰せらるる」ということが強調してある。言うまでもなく善知識は信を教えられる根本である。「歎異抄」に「よき人の仰せをかうむりて信するほかに別の子細なきなり」とあるのもこれである。

「信をとらぬによりてわろきぞ、ただ信をとれ」とは如何にも適切極まるではないか。真実の信心を徹底することは、自然法爾に正道正理に叶うのである。如何に自分ぎめで正邪を辯じようが善悪を論じようが、それは畢竟五分五

れ候。」

という「御文」のお示しも、今更に深く感ずる次第である。

全体真俗二諦とか、仏法王法とかいうて、原則が二つあるかの如く考えるのが大なる誤であることは、従来より繰返して居ることで、今更事新しく言うまでもないが、併しながら動もすれば蓮如上人がこの二原則の主張者である如く考えて居る者は、この「御一代記聞書」によりて、如何に信心一つであるかを知る可きである。

全体世間の律法道德を主張する人でも、その他現今何々主義を標榜する者でも、兎角自分の計らいを以て他に押し付けんとするは大きな間違いである。「何事も御意のごとく存候」と言つた処で、信がなかったならば魂の抜け殻である。信があらわれて始めて真の道德も人生も、その外百般の事柄が正しく実現するのである。今更ながら信界建現の尊きを仰ぐばかりである。我々の革新の主張と雖も、主張の形式ばかりつじ棲を合わしても信がなかったならば何にもならぬのである。又信を持たずしてつじ棲を合わそうとしても、何処か喰い違いが出来てつじ棲が合わぬようになつてくるのである。併しながら形ばかりでも正しきに立ちかえらんとするは恕すべしである。人の正しきに立ちかえらんとするを破壊する如きは、いよく／＼信のなき証拠で敢て宗教界ばかりのことでない。人生萬事皆これである。

聖徳太子の十七憲法第九条に曰く。

「信は是れ義の本なり。毎事信有れ。それ善悪成敗は要ず信に在り。群臣共に信あらば何事か成らざらん。群臣信無ければ萬事悉く敗る」

斯くの如く人生は信の道さへ歩けば、必ず行く可きの処へ落ちつくのである。若し信の道を踏みはずす時は如何に奮闘しても横道に落ちるより外はない。かくの如く人生に信の一筋道があることを思えば、人間の行動に注意しなくてはならぬ。

俗諦門というも、正義道德というも、畢竟この信の道を踏みはずさぬようにすることである。否信があれば踏みはずしたくても摂取不捨の力で踏みはずすことの出来ないようになるのである。それ故我れ信をまもるとは言えない。実は利欲に引かれて信を逃げたい／＼とすれども、仏の力で通げることが出来ぬ故に、しようことなしにまもるのである。かく言えば甚だ弱い道德のようであるが、決してそうではない。我は信じて行うから偉いのじゃというような信こそ、頗る危険千万な自分決めの信である。自分ぎめの自力の信では駄目である。是非とも絶対の如来を信ずる信の力で引きずられるのでなければならぬ。

それ故絶対の信は、一面には自分の欠点を自覚し、頭を下げる、罪悪感があらねばならぬ。一度この罪惡に気付い

○御病中に蓮如上人仰せられ候、御代に仏法を是非とも御再興あらんと思召候御念力一つにて、かように今まで皆々の心やすくあることは此法師が冥加に叶うによりてのことなりと御自讃ありと云々。(一四三)

これ皆「善悪成敗は要ず信に在り。群臣共に信あらば何事か成らざらん」の実証である。

斯くの如く精神的の信を以て進みたる結果が、最後に眞実の結果を持ち来して、客觀的事實を建現するのである。所謂信界建現である。

かく簡単に言つてしまえば易いようであるが、抑々信念より起りて建現に至る、その経過なるものは容易なことではない。現に蓮如上人が御一生の間、御わらじの緒くい入り、きらりと御入り、京田舎御辛勞なされたる結果が、最後の大阪建立とまでなつたのでないか。上人が大谷を焼き出されて以来、吉崎御滞在をはじめ長々の御苦勞は、信の一つを以て貫かれたのではないか。

すべて古来の宗教家は信念を以て進む時は、当時の人に理解されるには余りに現代を超越しているのである。さればこそ現代の凡人輩はこれを理解せずして迫害し、死罪流罪、幾多の殉教の血を流すことになるのである。

かくて肉に死して靈に生き、成功を犠牲にして理想に生きたものが偉人である。古今偉人の最後はかくの如くであ

た以上は、あと戻り／＼して如来の信へ引き戻されるのである。かくてこそ人間が成功をねらって危険な不信の断崖へ落ち込む處を信の力で正道に引き戻されるのである。故に正道を行うものは決して成功などを眼中においてはならぬ。畢竟自分の利益をかえりみずして信の道に進むのである。

それ故信の道を行く時は、自分は成功をねらわぬが、自から仏の力で成功せしめらるるのである。之に反して成功をねらう者は、却つて自分で奈落へ飛び込むようになるのである。蓮如上人はこの経験をしば／＼物語られている。

○蓮如上人御病中に仰せられ候。御自身何事も思召立候こととの成行くほどのことはあれども、成らずという事なし人の信なきことばかり、かなしく御歎きに思召の由仰せられ候。(一六三)

○同仰に、何事も思召すまに御沙汰あり。聖人の御一流をも御再興候て、本堂御影堂をもたてられ、御住持をも御相続ありて、大阪殿を御建立ありて御隠居候。然ればわれは功成り名遂げて身退くは天の道なりということ、その御身の上なるべきよし仰せられ候と。(一六四)

○同御病中に度々仰せられ候と云々。慶聞に仰せられ候。賊縛の比丘は王遊に草繫を脱し、乞食の沙門は鵝珠を死後にあらわすと云う戒文をたび／＼仰せられ候由に候。御滅後に不思議をあらわさるべきの仰に候(異本一六五)

ろう。かくて偉人を葬りたる現代凡人は、後になって目が醒めるであらう。

全体相対的人間が自分ぎめの差金を以て、人生を律せんとする如きは、短見も甚だしきものである。いわんや偏執の考を以て一世の人心を圧倒せんとする如きは、所謂水を防ぐより甚だしき次第である。瓦解土崩は自然に來る結果である。

いやしくも信に生きるものは結果を見てはならぬ。結果を見て動く者は、信の無い証拠である。時には成功したるが如く見えれど、その裏には大破綻が臨んで居る。

全体一口に信と云えば容易なことのようにであるが、何人と雖、自己をまことと思わぬものはない。また我こそ信念を以て行っていると思わぬものはない。この自分ぎめのまことや、信念が、相対的なるが故に甚だ危いのである。

絶対の如来を信じ、眞実の仏の下に摂取されて、自己の不実を懺悔し、是非知らず、邪正もわかぬ我が身なりと自覚したる時、絶対の信が來るのである。今更ながら親鸞聖人の『和讃』にある絶対信の言葉を思い出すのである。

よしあしの文字をも知らぬひとはみな

まことのころなりけるを

善惡の字しりがほは、おそろごとのかたちなり
是非しらず邪正もわかぬこの身なり

小慈小悲もなければ名利に人師ひとしこのむなり
ひと昔前の話なれど、綱島梁川がこれを聞きて、偉大なる凡人なりと絶叫したのも無理はない。

かくの如く絶対の真実の下に相對の自己を投げ出したる時、人間初めてこの絶対に引き戻されるのである。かくてこそ成功を捨ててもこの信に随したがわざるを得ぬのである。生命を犠牲にしても所信を枉よこしまぐるることが出来ないのである。

かくの如く人生問題として論じ来れば、さも珍らしきことのように聞えるかもしれぬが、抑々弥陀の五劫思惟の願、兆載永劫の修行によりて浄土を建立したまうたというが、畢竟この絶対信念の源ではないか。經に「修する所の仏国恢廓くわく廣大にして、超世独妙なり。建立常然にして衰なく変なし」とあるは、即ち建現の事実ではないか。この建現を持ち来した信念なるものは、如来の清浄真実そのものに外ならぬ。經に「欲覺、瞋覺、害覺を生ぜず、欲想、瞋想、害想を起さず……少欲知足にして、染患痴無し……和顏愛語にして、意を先にして承問す、云々」斯くの如き菩薩の信念は、終に浄土を建現せられたのではないか。

かく云えばとて我等も律法的に、かくの如くせよと云うのではない。かくの如き如来に摂取され、斯くの如き浄土を莊嚴して迎えられる以上は、我等もその絶対の真実に導かれ、その真実の報土に入らねばならぬのである。

求道と人生(一)

華嚴經入法界品に就いて

信と冥想

善財童子が文殊菩薩の前に求道の心持を申し述べますと云うと、文殊はこれに對し、どう云うことを答えたか、御經を見ますと、その時文殊は象王の回るが如く、善財を觀じ、どしりと靜かに善財の方に向い、次の如く述べるのであります。

「善哉、善男子、乃ち能く阿耨多羅三藐三菩提心あうたらかんぼくさんぼだいしんを發し、善知識を求め、善知識に親近して菩薩行を問ひ菩薩道を求めんとせり。是れを菩薩第一の藏にして、一切智を具すとす。所謂善知識を求め、親近恭敬して、一心にこれを供養するなり。是故に善男子、應に善知識を求め親近恭敬して、一心に供養して厭足無く菩薩を問うべし。云何か菩薩道を修習し、云何か菩薩道を満足し、云何か菩薩行を清浄にし、云何か菩薩行を究竟し、云何か菩薩行を出生し、云何か菩薩道を正念し、云何か菩薩の境界道を緣じ、

かくの如き絶対信念を持ちてこの人生に活躍する以上は、自然法爾に入生的に信界建現の事実は、当然のことと言わねばならぬのである。それはただ宗教界の事ばかりではない。人生いづれの境涯にも透徹する、明白々、露堂々たる事実である。
(病床口話)昭和七年

還相 筑紫野春草

わが祖父のただ一枚の写真あり七十幾才か頭髮白し

官紗略衣くわんさりやくいに無金輪袈裟のま新らし中啓を握り椅子にかけます。

興法の志にもえて一生清貧にしてつつましかりき

徒らに名利めきたるわが法衣花やかにしてこころまづしき

福島政雄

云何か菩薩道を増広し、云何か菩薩普賢行を具する」と。
この文殊の申します意味を大体申しますと、先ず善財童子が阿耨多羅三藐三菩提心あうたらかんぼくしんを起したということを非常に讃めるのであります。人間は志を立てることが第一のことである。お前が無上菩提心を起したことは最も善いことである、善哉々と賞讃するのであります。

華嚴經の前編の方を見ますと賢首菩薩品の中に、「信は道の元、功德の母なり」と云う言葉がありまして、これは華嚴經の中にしばしば引用される有名な句であります。信と云うものが求道の初で、又功德を生み出す所のものであると云うのは、今申したと相通じているわけであります。文殊は菩薩の十信の位を代表して善財のために、道の元、功德の母となっている訳であります。

さて、文殊は善財を讃めて、これから南へくと求道の歷程を積ましめるのでありますが、すでに文殊に会ったと

いうことが、その歷程に重要な意味をなして居るので、文殊における所の信と云うものに、この求道の第一歩が始って居るのであります。これについては、奈良の東大寺の絵巻物を描いた人の讃がありますが中々面白いのであります。

娑羅林裏象王廻 古昔如来塔廟開

百十一城遊已偏 云何重去涉塵埃

こう云う讃でありますが、つまり文殊の前に善財が自分の衷心の感を打明け、文殊が之に教を示すが、この文殊の導く所のものは、即ち百十一城の全歷程の中に含まれているということになる訳であります。

これから先の善財の求道の歷程には、常に文殊が影の形に添う如く善財について居るのであります。そのことについては後に又申し上げます。

そこで善財は文殊の励しによつて、愈々南の方へと求道の旅を続けるのでありますが、先ず最初に文殊の教えた可樂国の和合山に、功德雲比丘という修行者を訪ねるのであります。これは菩薩の十位の第一番、初発心住を代表する善知識であります。ここで比丘は和合山の頂に居って静かに山を眺め、雲を眺め心を静めて、その辺を歩いて道を修して居るのであります。この山と云うことについては、これは私の勝手な申し事ではありますが、こう云うことが感ぜられるのであります。山というものは静けさを現わした

自分はこの海辺に十有二年の間冥想に耽^かつて居り、この大海を自分の世界としている。而して毎日この大海を観察して居るが、段々自分は考を深くして居る間に、或時この大海の上に不思議なことが起った。それはこの大海の真中に美しい蓮華が現われて、その蓮華の上に座し給う仏、菩薩の姿を明らかに拝したのである。こう云う物語りをするのであります。

そこで今海雲比丘が十有二年の間大海に対して冥想に耽^かつて居ったと云うのは、十二因縁の無明の限らないことを観じて居るので、観ずれば観ずる程益々限りがない海である^{と云うことを感ずる}。而してその海の中から或時は蓮華が咲き出て、その蓮華の中に仏の姿が見えたというようなことは、何であるかと云えば、我々人間としてはこの煩惱を離れて菩提はないのである、煩惱の大海から蓮華が現われたと云うのはこの意味であります。それで我々が愛に迷って居ると云う場合は、決してこの十二因縁は見えて来ないのであります。いくら口でどうとか、こうとか云って居りまして、自分が現在愛に迷って居るという場合には、自分の前に十二因縁が見えないのであるが、この十二因縁が見えると云うのは、仏の大光明に依つて照し出されるから見える、こう云う味わいがあるのであります。これが即

ものである。成程海というものも或る場合は静けさを現わしますが、海は一面に於ては非常な動きを現わすものであります。所が山は常に非常な静けさを現わして居ります。仁者は山を樂しむと云われますが、本心に心の落付いた人々は山を樂しむと云うことは確かに一面あります。

善財が文殊に導かれ、先ず第一番にその山で静かに修行して居る所の功德雲比丘を訪ねて参り、ここでどう云うことを味わうかと申せば、光明の中に諸仏の三昧を正しく認め観察すると云う、光明觀察正念諸仏三昧法門というものを味わつてあります。詰り静けさの世界と云うものから始まって、初発心住という空觀に入る発心——仏教の空という味に入つて行こうと云う発心を起すのであります。この空ということは今ここで申し述べませんが、段々修行が進むに随つて味われて来るものであります。

山に於て先ず静けさの世界を味わつた善財は、次に功德雲比丘の教によりまして又南の方へと進んで参りますと、今度は海門国と云う国がありまして、その海辺に出家の修行者で海雲比丘に会うのであります。善財はこの比丘に向つて、私は如何にすれば菩薩行に徹底することが出来まいようかそれが分りたいのでありますと尋ねるのであります。海雲比丘はこれに対して次のように答えるのであります。

ち諸仏菩薩光明普眼法門で、そこに治地住と云うことが現われて来る。自分の愛と云う一念に十二因縁が見えて来るというところに、大地が治^さまつて来る、大海に波が立つてゐるのが治^さまつて来る。こう云う訳合になつて来るのであります。そういう風に考えて見ますと、海雲比丘が善財に説くところは中々味わいがあると思うのであります。

無礙の觀照

そこで善財は非常に喜んで海雲比丘に厚く御札を申し、更に比丘から指されるままに、今度は南の方の海岸国に於ける善住比丘という出家の修行者を訪ねるのであります。さてこの比丘は虚空を散歩して居るのであります。これは不思議な表現でありますが、この比丘の味わつて居る所のものは菩薩無礙法門である。無礙と云う味わいを空中を散歩するといふ形を以て現わしてあるのであらうと思ひます。

この無礙といふことは、華嚴經全体を貫く味わいであり、ます。これは段々後にも出て来ますから申しますが、無礙とは如何なるものにも障えられないといふことで、善財の求道そのものが無礙であります。善財の求道の前には如何なるものも善知識となる、これが無礙の味わいであり、そこを凱^が切に説き示されて善財は非常に喜んでこの修行住^{ぎやうじやう}（万善を修行す）の善知識の許に別れを告げ、その指示に

よって又南方へ進んで参りますと、今度は自在国という国に呪薬城と云う城がある。そこに大変よい医者で弥勒と云う善知識が居りここで教を受けますが、この医者は正法堂と云う所の獅子座に座して説法して居ます。この弥勒から菩薩の云う所は少しも虚のないという道、即ち菩薩の所言不虛法門を示されるのでありますが、この医者は生貴住を代表する善知識である。生貴住とは、無我の理に安住して貴いものをそこに生じて来るといふ心持でありましよう。

善財は又非常に喜んで、その指示のままに又南方の住林国に参ります。そこに解脱長者と云う一人の長者が居り、この長者に、善財は菩薩の行を尋ねるのであります。すると無礙と云う心持を一層深い所から説かれるのでありますが、この経の表面に説かれている所によれば、自分は此所に座った儘で、あらゆる世界の仏に会うことが出来る。而してこの一切の仏と云うのは悉く幻の如くであるといふことを知ると云うのでありますが、これは非常に大事なことでありまして、私共はこの求道の歷程に於て、もう一つ引掛る場所がある。それは今度は仏と云うものに引掛る。自分の煩惱に引掛ると云うことは私共始終あり通しのことでありますが、併しその煩惱を解脱したと思つと、今度は仏と云うものに引掛る。即ちこの仏と云うものを偶像化して、それを見ていると云うことがあります。すると仏と云うも

病床雑記

療病生活すでに十ヶ月、月日はさら／＼と流れる。不幸だと思つた日は一日もない。日々是好日、どことはなしにたのもしく有難い。外に向つて求むる幸福なる何物もない。今が幸福な第一人者と思われ、幸福というものが外にあるのか内にあるのか考えさせられる。外に向つて幸福を探し求めねばならぬとせば、そのこと自体が不幸なのではなからうか。幸福を外に求める余地のないほど満たされた今の自己の幸福、それは救われたものの境地であらう。「そのままの救い」「撰取不捨」ああ何物にもくらべることの出来ない幸福、そして何物にも左右されることのない幸福、地上には全く見出しようもない本質的な真実の幸福を、この地上にあたえられた絶対無上の幸福者である。まことに他力廻向なるかな。

○ 人生の幕がとざされ地上を去る日がきたとしても、さて遺言めいて後事を制するようなことを言いのこす思いはさ

のについて有の觀念に陥つて了うのであります。仏教の根本問題は一切の仏は悉く幻の如くであるといふことを識る。こつといふ味わいが一面にあるのであります。而してそれと同時に一切の仏に自分が出会えるのであります。これは非常に矛盾した様ですが、そう云う矛盾の統一と云う所に非常に面白い味わいがあると思つのであります。この解脱長者の言葉の中に、自分は安樂世界の無量寿仏に会わんと思へば何時でも会えると云つて居ります。

東大寺所藏の繪巻物の讚に次の面白いことがあります。

十方世界微塵刹 各有如来坐道場

彼仏不来吾不行 朗々影像水中央

こつ云う心持であります。そこに無礙と云う所が現われて居ります。一体この無礙について、華嚴經の前編に如来林菩薩の偈文に、人間の心は巧な絵師の様で、人間の心の中に一切の物を描き出す、総ての物は我々の心で作れないものはない。その心と仏といふものと衆生といふものと三つあるが実は一つである。この三つは無差別であるとあります。これはよく引用されますが、一つ一つ考えると段々難しくなりますが、大体の心持は無礙といふ心持が現われて居ると思つのであります。 (未完)

酒井演幽

らに見出さぬ。妻は涙ぐみつつ、言いおく大切なこと、渡す重要な鍵はありませんかと聞く。さあ地上のこと家庭のことについて重要な鍵はあなたの方がくわしい位でしょう。お浄土への扉は凡夫の智慧や計らいの鍵では開かない。唯仏願に随順するお念仏の鍵ひとつだ。とり失わぬように大切にしましょう。

あとはまごころこめて善処することです。軽卒な態度や浮薄な生活をつつしんで、安価な他人の同情や口実にまどわされぬよう用心して、お念仏一道を深く心がけ、み仏様のお給事を大切に、坊主としての職域を死守することである。複雑な問題で思案に余ることは里方の亡き父母に代る兄上に相談するがよい。まごころこめて善処した上は静かに時をまつがよい。

○ 十ヶ月にわたる難症の疾患、治病のための現世祈禱など全く念頭にない。従つて一度の勧誘にも、一人のさいそく

にも出あわれない。

『教行信証』の法悦は強くまた底深いことである。念仏一道の安住は徹底的である。この幸せを多くの人々へ分ちたいと念ずれども受取って下さる方が少ない。そして土地財産は道理にはずれてむさぼる。無上宝珠のお名号は世間の方には高尚すぎて猫に小判であろうか。みみずには土が生命でもある。寺族の者だけは是非この幸せを受けいれて頂きたいものだ。互に合掌しお念仏させて頂く。いよいよ外科的診療と決した上はもはや余念も雑念もない。まかせきった境地は担々たる大道を踏みしめるようなものである。なるようになってゆく、なるようにしかならぬ。

暮れゆくも明るくもともに南無阿弥陀 みに手にひかれてわれはゆかなん

生も死も業縁のままみ仏の みひかり仰ぐこころやすさよ

○ 「生よ死よ老よ病よ憂き悲しみの悩みせまれる」——これ人生の実相であろう。

「人もひとたび仏を見れば」——ああまことにみ仏さまの真実を拝む眼をいただいた、否み仏の真実われに徹到して如来の真実を味識する眼となつて下さった。「開眼供養」にあずかったのが私の信であり法喜である。「心は清き世界

業報に随順しうる身にお育てをうけたことは何としても幸せである。すでに救いの半面である。多くは業報に反逆して苦悩を倍加し、果ては破滅をまねく。

なにごとも弥陀にまかせてなむあみだ よきもあしきも業報のまま

○ 旅人のするが生命の繩を白黒の鼠が昼夜たえずかじり減らすように生命は刻みとられ肉体は消耗しつつある。然し平生は雑念に覆われ精神は麻痺して何等その感じをもたない。病苦こそこれを自覚せしめる。良薬は口にながく痛みは身にこたえる。腎臓、膀胱・尿道・痔と古家の柱が傾き壁がおちてゆくのに似ている。白蟻のついた建物のようにでもある。

ある人から毎朝鏡の中の顔を見つめて、私の病は必ずなおる大丈夫だと二三回断言し、毎夜同じようにお前の病氣は治った、大丈夫と言いきかすと、これが暗示となつて難病も治る、これが秘伝だと聞かされた。いかにも病中こころの持ちようは大切であろう。徒らに不安や悲観に陥つては病氣を悪化し生命も縮めるであろう。然し地上ゆるす限りにおいて万全を策して善処すべきは当然であるが、最後の一関は如何ともしがたい業縁の催し業道の然らしめることであろう。徒らに「必ず治る」「必ず生命は大丈夫」と

に入らん」——おお罪業ふかく宿業をいだいたまま如来のふところに安住させて頂く、そして自然の浄土に至らしめられる。まことに誠に勿体ないきわみである。

○ 空をつかんだようで何もない。そして一番たのもしく力強い底力を体感する。まことに不可思議なことである。

○ 何事も果しえず、未完成のまま不完全のまま未整理のまま、出来そこないのまま地上を去る我である。詫びることより外に術なき身であることを痛感する。

○ 肉体は衰弱するがお慈悲は強くなって下さる。身は細つてゆくがご恩は太つて下さる。病勢すすみ衰弱加わるにつれ名利の夾雑物がふるいにかけられる。御慈悲と御恩とが純化されてゆく。

○ 「苦」は多くの場合こころの用い方の間違つた出発による。心を自分勝手におく時は苦は無限に発生する。地獄の建設者となる「心」をととのえ常に如来に導かれるならば、苦は喜におきかえられる。逆境も感謝すべき素材となる。念仏者に逆境なし、順逆二境ともに法悦境への練成である。

○ 頑張つてみても誰がこれを保証するであろうか。暗示は精神活動にある程度大切であろうが、却つて危険な考え方で、不安は伴い、若存若亡の迷情はまぬがれない。「往生は決定」これは全く仏の本願力の催したもう他力のご廻向である。「若く生ずる不取正覚」願力決定の故に凡夫の信心おのずから決定す。実に恵まれた最善の暗示であり、大悲廻施の安堵心である。

○ 尿器を逆にもつたため床の上に一面尿がはらんした。これが看護人の仕打であつたらどんなに裁いたことであろう、閻魔となつて怒りの炎を燃やして罪をつくつたに違いない。ところが自己の過ちを許すことは至極寛大である。○ 洋々たる大海のように。又自己を弁護することは天才である。

○ 悪業深く今もつて全治に至らず業ざらしの日常を送る。「そくばくの業をもちける身」を見おとさんとするこの身に手きびしいご催促である。「たすけんと思召したちける本願のかたじけなさよ」と病苦を縁として大悲を仰ぎ、自己の業因の深さを凝視せしめられる。

真宗聞きがたし

年があらたまるということは、何か新しい希望を与えてくれるものであるが、現実のきびしさは、どうも私に夢を与えてくれない。

正像末の御和讃を拝読していると、末法濁世となげかれた祖師のお言葉が、切に私の胸にひびく。今日ほど生きることに不安と焦慮を感じている時代はない。国民は皆生活に苦しんでいる。「よろずのこと、みなもてそらごと、たわごと、まことあることなき」ことを、我々は敗戦によって骨に徹して知った筈である。このへんで、お念仏がさかんにならねばうそだと思われる。それほど時縁は熟しておりながら、しかし念仏は一向に盛んにならない。新興宗教は相当に伸びてゆくようであるが、この不思議な現実の事実を、どう解釈したらよいであろうか。

ところが、今日のような時代にも、と云った人がある。この二つは、対立した見方のようであるが、実は真宗の教が聞きたいという一つのことを、左右から云いあわし

はここにあると思うのである。

真宗の教を聞くと、どんな得がありますかとたずねられる。何をするにしても、意味とか目的とか利益を念頭においている現代人として無理からぬ間である。金がもうかる病気が治る、商売が繁昌するといったら、それで満足するのであるが、そうは申されない。達磨大師ではないが、無功徳だ。これを手に握るような実質的な御利益はありません、と答えるよりほかには致し方がない。

今日一日、私が生かされてあることにまさる大きな御利益がどこにあるのか。この平凡な、しかし偉大な事実が、わかつてもらうことは、なかなかむづかしい。

先日でも或る処で、我々が生きているということは、聞くことが残っているのだと申したら、この夏以来、神経痛で外出できなかった御同行が、久しぶりに参ってこられて、おかげで快くなつて、夏から初めて御縁にありました。病気が治つてお参り出来ることも、やはり私には聞かしてもらわねばならぬことが、沢山のこつているのですね。それだけ業の深い、お手数をかけるものです、と念仏しておられた。

これが余の宗旨であれば、神様のおかげで治つたという現世利益にもつてゆくところであろうが、私には聞くべき法が残っている。それだけ私の業は深いと信嘗しておられ

(故) 佐々木 徹 真

たものと思われる。お互に苦勞はしているが、その苦勞を通じて自分の業の拙なさを思う人が幾人あるであろうか。生活苦の原因を敗戦や政治の貧困に帰して、不幸や不満を云うことは知っていても、己に還つて自分の罪の深さを思う人は少ない。外への批判を内にむけて、己の業の深さを思う人でなければ、念仏は申されない。

如来の光に照破された人間の相を、虚仮不実・煩惱熾盛と赤裸々に説くことは、教養とか道義とかいったもので化粧して、善事を為すことが出来ると思いこんでいる現代人には、却つて近づきたいものではあるまいか。人間というものは上品によそおっているものであるから、あまりにもはつきりと、それが真実であつても、心の奥の奥をえぐり出されることは、氣味の悪いものである。

地獄は一定と信知する身は、念仏はありがたい教であるが、止悪行善の徒には、むしろ怖るべき教であろう。時縁は熟していても、世人が真宗を聞かない理由の一つを、私

る。ここまで育てられるというのは、容易なことではない。時縁が熟しながら、世人の念仏に近づかない理由の一つが、この辺にもあるのではあるまいか。

像末五濁の世となりて

釈迦の遺教かくれしむ

弥陀の悲願ひろまりて

念仏往生さかりなり

祖師の時代でも、決して浄土の教は盛んではなかった。

これは外形のことではない。「一宗の繁昌と申すは、人の多くあつまり、威の大なることにてはなく候。一人なりとも、人の信をとるが一宗の繁昌にて候」と蓮如上人は云われた。

しかれば私のようなものの腹の底から、南無阿彌陀仏の御名が出て下さる。私一人が救われる、そこに十方衆生の救われる道は開けている。私一人が念仏申しめられる。これが一宗の繁昌であり、「念仏往生さかりなり」である。

聞きがたく、遭いがたい真宗の教法に遭うて、念仏申す身の幸を思つて、遠く宿縁をよろこびつつ、逝く年を送り、新しき年を迎えよう。

「人生に思う」より

青蓮華(六)

魚はめば魚の骸骨血にあり

恐ろしきわがいのちとぞ思ふ

人間が当然と考へ、当り前と思つてゐる生活の中に、深く人間の業が潜んでいます。今あるこの人間世界に何の疑問も持たず暮してゐるのですが、実はこの世は人間が作り出してゐる世界であつて、決してこの世界が総てではないのです。ゲエテが『ファウスト』の中で「人間は馬鹿なちっぽけな世界に住みながら、それを全体だと思ひ込んでゐる奴だ」と悪魔に嘲けらせてゐる一節がありますが、まことにこれは人間一般の意識を鋭く抉つてゐる言葉であるといえます。

過去悠久にわたる生物の歴史は強食弱肉の流れの中に成り立つてきました。他の生を犠牲にせねば生きられぬ命、それを直視すればわれ／＼の背負うてゐる業を思はずにはおられません。西洋の宗教にこの事は問題にならぬのでしようが、仏教には切実な問題なのです。またこの事が戦争

界人類に対する宣言であり獅々吼であると申すべきです。

眞の和は、我執の迷いに一如眞実の光がさしそつとき始めて開かれます。親鸞聖人は聞信の一道に大悲心の真心徹到したまふことを身を以て教えられました。われ／＼共々に一日も早く此の道の成就を期さねばなりません。聖人が「世のなか安穩なれ仏法ひろまれ」と申された言葉の奥にも、切実にこの御心が強く深く動いてゐた事を思うのであります。

○ 善し惡しの迷をおさめもの皆を

一つに照す智恵を開かん

是非善惡は人間にとつて大切な意識でありますけれども、それが必ずや我他彼此の分裂と我執とに、不可避に結合せざるを得ないのも人間の悲しい現実です。善惡の分別が自是他非の心に必ず表裏するのは何故か、さらに思ふべき事は、何が善か悪かを末徹つて知り尽くすことが人間に出来るかと云ふことです。「如来の御心に思召すほど知り徹したらばこそ善きを知りたるにてもあらめど……」と聖人の仰せられたお言葉が胸に沁みます。まことに人間の思考する善惡に絶対といふことはありません。その相対分別の善惡に確執するところにこそ騒乱の根源があります。

太子憲法第十条に「我れ必ずしも聖に非ず彼れ必ずしも

井上善右エ門

せずにはおられない人類の業に深くかかわつてゐます。その業が底に沈澱して姿を隠し、表面の平和論争に明け暮れてゐるのは、根を忘れて木を見るものです。業の切なる自覚と解脱への道、それをこのわが身の上に視つめられてゐるのがこの一首であります。

○

とげとげしき争ひの心うちに秘め

平和の為とざわめく世かな

白井先生の静かな信の奥から、閃めき出る世相への鋭い警鐘の一首です。先生はかく叫ばれずにはおられなかつたのでしよう。争の心をもつて平和を論じ、平和を闘い取ろうと言う。そこに潜む大きな矛盾になぜ人は気づかないのでしょうか。人類の胸にまことの和の心が訪れる日まで地上に眞の平和は来ないでしよう。その故にこそ聖徳太子は、和の何たるかを仏心に帰つて教えたまい、憲法の第一条に「和を以て貴しと爲す」と告げたまうたのです。これは世

愚に非ず、共に是れ凡夫のみ」という仰は、人間意識の次元を一転せしめるお言葉です。そして聖人が「そらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」と仏心を仰ぎ仏願に帰りましたところ、一如の眞実が顕われて下さいます。そこに執われなき法爾自然の善がわれ／＼の生活を輝かし、健かな世界の秩序を建立するのです。それは念仏に宿る如来の知恵が然らしめることです。人類はここに眞の平和の訪れをむかへることができましよう。「もの皆を一つに照す智恵」それは眞如一実の信海に浮かぶ心に射す光の風光であります。

○

いつの日に死なんもよしや弥陀仏の

みひかりの中のおんいのちなり

この一首は先生が古稀を迎えられたときの感懷を詠じられたものです。ここに見事にも美しく、期せずして生死を超えておられる消息を感じます。仏法は生死解脱の道です。それはとりもおさず死の解決であります。しかしその解脱と解決とは、決して人間の思念工夫で成就されるものではありません。古よりの求道者は命を賭してこの道を求められました。若き日の聖人はまたその道に身を挺されたのです。そして遂に弥陀仏の弘誓に値遇されたのであります。大悲の眞実に遇い、無量寿の攝取光中に永遠の帰依処を

たまわった身は、もはやわが命にしてわが命にあらず、お
おけなくも弥陀仏のおんいのちをわがいのちとして生きる
身とならしめられます。だから、みひかりの中のおんいの
ちと、わがいのちを拝んでおられます。これは光明の広海
に浮ぶものの現に目ざめるようこびです。そのとき最早
身の執われは超えしめられて「いつの日に死なんもよしや」
と安らうておられるお心がよく／＼有難く拝されるのであ
ります。

○

たまゆらの世に生れて永への

さとの道をきくべかりけり

「何のために生れてきたのか」これはながい／＼年月、私
の胸裏の底に沈んでいた謎でありました。その疑問にいか
ばかり右往左往の道を彷徨したことでしょう。白井先生は
若き日、菅瀬芳英師から、正信偈の「如来所以興出世、唯
説弥陀本願海」の二句を示され、われ／＼がこの世に生を
うけたのは「衆生所以生出世 唯聴弥陀本願海」であるぞ
と、厳しい訓しを受けたと屢々感銘の思出を語られました。
人間にとって何が最も大切にして尊い事か、この事が明
らかにならぬ限り、人間は心の物足りなさとおびしさを拭
い去ることはできません。それは人間の本当の願いを満足
していかないからです。

慈光日誌抄

—— 公正忌報恩講 ——

まずは本年もおよろしく、と謹んで申し上げます。尤も
そう申しまして、ペンをとっております只今は、まだ師
走のあわただしい最中でして、小閑をえて漸くこのように
書きはじめた次第であります。

幸いに花田先生も無相さんも、御病気がちながら、とも
かく生きていてくださって、まことに有難いこと。それに
つけまして、無相さんと同じく八十歳の春の榎本栄一翁
の、左の詩が念頭に浮かぶことです。

再びは通らぬ

一度きりの

尊き道を

いまあるいている

○

いよいよ聖人御正忌の季節。さる日、聖人ゆかりの六角
堂の前の六角会館の報恩講にお参りして、信楽峻磨師の法

限られた朽ちゆく生に執着して、どうして本当の安らい
が得られましょう。何のために生れたのかという疑問に悩
むのもこれがためであります。

無量寿、無量光の真如一実の徳を賜わる身となるとき、
この疑問は解消します。たまゆらの世に生れて、永への
真実に遇うということは何という幸いでありましょう。よ
くも人と生れて仏法に遇いえたことよと、その至上の有難
さを謝しまつらずにはおられないのです。

(十二月二日、稿了)

諸行無常

仏教音楽協会

たかねにかかる白雲の あはれつかの間 いこふみにも
なほあめつちに みつるいのちを たえず頼めばさなが
らやすし

よどみに浮かぶうたかたのあはれはかなく消ゆる世にも
なほとことはの のりの光を清くうつさば生死にすまむ

心にかがくまぼろしの あはれ空しく結ぶ夢も

なほ迷い路のうるの奥山 いまし越ゆれば跡なく醒めむ

西元宗助

話拝聴。そのあと「如来大悲の恩徳は身を粉にしても」の
『恩徳讃』を声高らかに斉唱し、わたし如き無明の衆生を
救わんがために、それこそ「身を粉にし骨を砕いて」兆載
永劫のご苦労をなされた如来の大悲と師主・知識御開山・
親鸞聖人の御恩徳を憶うことでありました。

しかし、またこの私の口先とは裏腹の、この忘恩背恩は、
どうしたことであろう。ただ南無阿弥陀仏・南無阿弥陀仏
と申すばかりでございます。

○

ある書店の依頼で「他力の信心」と題する小冊子を書かせていた
きました。その頭初のところだけを、左にご覧に供します。

あなたは、どうして念仏申すようになったのかと、こ
う尋ねられたことがございます。それで私、とつさに「お
蔭さまで」と申しあげてみましたものの、しかしこれだけ
では、あまり綺麗ごと聞こえて、わたし自身の気持にも添

いませんで、あらたまつて、なんともならん、それは、それは、業の深いものでございますからと、こうお答えして、そして心ひそかに、なんまいだぶつと申して、ようやく落ち着いたのでございます。それにつけても、かの石見の才市の、

わたしや

あなたに拝まれて

助かってくれと拝まれて

ご恩うれしや 南無阿弥陀仏
という詩の、「わたしや、あなたに拝まれて」という言葉が、身に沁みるのであります。実際仏様に拝まれて、いや、拝まれどおしでございます。まことに「親さま」が、わたしの生みの親ともなり、先生がたともなつて。殊にわたしの母がたの生家は、薩摩の、いわゆる「かくれ念仏」のご縁の深い流れでございますから。

これらのおん方々のことを思いますと、あらためて、才市の「わたしや あなたに拝まれて、助かってくれと拝まれて」と、じつはこれしか、わたしには申しあげることがないというのが本当なのであります。しかし、この心持ちを、もう少し述べさせていただきますと、こういうことなのであります。

普通よく、仏は親さまで、われらはみ仏の子であると。

衆生を拝み仕えたまうのでございます。そのお蔭で、われらは漸くにして、仏を信じる身にしていただけたのであります。

ここまで申しあげて、はからずも、あるときの足利浄円先生のご法話を想い起こすのでございます。それは華嚴經に説かれている有難いお話―み仏の恒順衆生ということで、先生がしばしばお説きくださったことであります。仏さまは、われら苦悩の群生海を救わんがために、恒に子牛が親牛につきまとうて離れぬように、み仏はわれら衆生に随逐して、つきまといたまう。そしてわれら衆生が迷うかぎり、み仏も亦われらと一体となつて同苦し、同悲し、必ず救わずにはおかんと大悲し給う。そのお姿が南無阿弥陀仏でございますと、こう仰せになつて、しばし絶句されたことを想い起こすのでございます。

先生は仰せになりました。そも／＼仏教とは、転迷開悟の教であると、即ち迷ヲ転ジテ悟ヲ開ク、これ仏教である。しかるにわれらは、自分が迷つてゐることすら気がつかない。いやたとい迷つてゐることに気づいたとしても、その迷いを転じることのできない、常に没し（沈み）常に流転して出離の縁あることなきわが身であると、ここに如来、大悲して法蔵菩薩となり、超世の願を建て給いて、われら衆生の「迷ノ世界ニ転ジテ」こられたのでございます

いや、み仏はわれら衆生をひとり子のように慈しみ給うと。これはまことに切ないお言葉でありまして、それだけに真宗においてはよく、仏を親さまと申すのでございますが、しかしこのように申すのは、今日では真宗だけではございません。多少の違いはあるにしましても、禪宗でも、いや天理教でも金光教でも、「親さま」と申すようであります。そういえば、キリスト教においても、「天にまします我らの父よ」と。

ところであるとき、わたしは大無量寿經の上巻を拝読して、いまして驚いたのでございます。そこには「不請の法をもつて、もろ／＼の黎庶（衆生のこと）に施すこと純孝の子の父母を愛敬するがごとし」と、あるではありませんか。ここに「純孝の子」即ち親孝行の子とありますのは、私ども衆生のことではなく、仏さま―法蔵菩薩のおんことであります。わたしは私の目を疑いました。愕然と致しました。ここに「父母を愛敬する」という「父母」とは、なんと、われら衆生のことでありました。

まことにわれらは、み仏に父母のごとくに敬愛され、拝まれている身であるのかと、思わず念仏申したことでございます。それはまさに驚天動地の感動でありました。

このように、阿弥陀仏は、あたかも親孝行な子が、その親に仕え、その親を敬し愛するように、そのように、我ら

と。すなわちお念仏となつて、われら衆生と一体となり給い、「浄土ノ悟ヲ開カシメ給フ」と、こう仰せでありました。それは私にとりまして、まさに大地も六種に震動するような感動でありました。まことに如来は大悲して、我となつて、この我をお助けくださるのであります。

ここは大事なところでございますので、もう一度くりかえして申し述べさせていただきます。仏教は、なんといいても転迷開悟、これが仏教―聖道仏教でございます。しかしわれらは「煩惱具足の身をもて、すでにさとりを開く」ということ、この条、もてのほかのことに候」と、歎異抄に仰せのように、迷いを転ずることの出来ない身でございます。このような我等衆生を、如来は大悲し給いて「衆生病むを以ての故に我も病む」と、これは維摩經にある有名なお言葉でございますが、このように如来の大悲は、衆生の罪業深重はわが身の罪業深重と、ここに法蔵菩薩は座より立ちあがつて一切苦悩の群生を救わんがために本願をうちたてられた。そして南無阿弥陀仏となつて、われら衆生の迷いの世界に転じてこられて我らと一体となり、浄土のさとりを開かしめ給うと、このように承つてゐるのでございます。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

「註」京都市下京区油小路通花屋町上ル百華苑刊「他力の信心」送料共一七〇円（郵便切手でも可）

明日への不滅の希望

ウィーン大学で精神科の教授のフランク氏の自序伝の中に、

「大戦の時、ユダヤ人であったためにドイツでナチスの言語に絶する迫害をうけ、仲間の殆んどは収容所で亡くなった。そうした中で私が生き抜くことが出来たのは、

『明日への希望』を失わなかったおかげである」

と述べている。同教授と親しくして居られる精神学者の岸本鎌一先生に、フランク氏の『明日への不滅の希望』とはどんな内容でしょうかとお尋ねすると、岸本先生がフランク氏に直接にそのことを聞かれたところ、

「それは、ユダヤの神の信仰であるが、それでは一般の人にはわかり難いので抽象的に書いた」といふ返事だったとのことであった。私はユダヤ教を知らないから、その消息を述べられぬけれど、その超人的信念の強さに心うたれた。

こうした人生の業海にあって、何よりも持ちたいもの、否、なくてはならぬものは、明日への不滅の希望である。不滅とは、その人の業報の如何を問わず、また他人の言動に左右せられず、且つは災難、病死によってもさまたげられぬものでなければならぬ。

しかも、それが優れた人、賢い人、徳の高い人のみが得られるのではなく、老少善悪、男女貴賤のへだてなく、さらに時処諸縁をえらばず、時代の流れも障えることの出来ないもの、言い換えれば、何人でも、何処でも、何時でも、行住坐臥を問わず、ただちに与えられる永遠の道でなくては私共のためにはならない。

ひそかに仰げば、そうした一切の条件をのこらず成就して、念仏成仏の白道を、釈尊をはじめとして、三国七高僧の方々が、入りかわり立ちかわり懇切にお勧め下さっている。私共にとってこれこそ唯一無二の不滅の希望である。仏力に支えられる故に無碍で、障り多い身にさわりがあるまんま障りとならなくなり、本願に護念せられるが故に不滅で、本願を妨げるほどの悪はなく、かえって転悪成善して下さる。それは私共の持ち合わせの力の強弱を超えたもので、仏願力の独壇場である。

噫！私共は何という幸福であろうか。釈迦・弥陀二尊を慈父母と仰ぎ、浄土還来の観音、勢至の二菩薩に護念せられ、

花田正夫

さて私共がたどる人生、五十年百年の旅も生やさしいものではない。牧水は

幾山河越えきりゆかばさびしさのはてなん国ぞ今日も旅行く

と詠じ、俳人一茶は、五十過ぎで家内を迎え家を持ち子も生まれたが、次々と子を亡くして、

苦の娑婆や 花がひらけばひらくとて

と述懐している。また先年九十幾才かで亡くなった歌人窪田空穂氏は、

老いぬればこころのどかにありえんと思いたりけり
あやまりなりき

と、ありのままの心底を吐露している。

実に生死の苦海は果てしがない。自業自得、身から出た錆とはいえ、それぞれの業報は、兎の毛、羊の毛のさきにいる塵ばかりも、すこしの狂いもなく身にうけて行かねばならぬ。

地上ではよき人々の慈育を蒙って、石・瓦・礫の如き凡愚の身をもって、往生の望みと、成仏の暁を迎えさせていただけとは！

私がかって、身寄りもなく財産もない行路病者や、孤独の老人達の収容されている施設を時々見舞った。そこには人として想像し得る限りのあらゆる人生苦にさいなまれて、身も心もカラ／＼に涸渇しきっている人達ばかりが身を寄せていた。

そこで皆さんと一緒に、先ず最近亡くなられた人々の霊前に拈香誦経し、やがて皆さんにお願いした。

「あなた方は、数知れぬ苦難の中をよく堪えて、今日まで生きて下さった。お察しするにはあまりがあることで、順調なお前方にこの苦渋がわかってたまるかと思われるでしょう。

ただ、ここで一つお願いがあります。目があるじゃありませんか、まず御仏を仰ぎましょう。手があるじゃありませんか、合掌しましょう。口があるじゃありませんか、念仏申しましょう。そして聖人方と共に浄土への道をたどらせていただきます。業縁に催うされては、肉親にさきだたれ、たとえ一切の人々から見はなされようと、み仏ばかりはお見捨てなく必ず浄土に迎えて下さり、

美しい仏のさとりをひらかせて下さるのです」と力一杯お願いしたことがある。

たのまるるただ念仏のわれにありさるべき業はさあらばあれ

の一首は、池山榮吉先生が、人生の種々な苦難の中にあつて、還暦を迎えられた時の正月元旦、仏前での所感であつた。これを説明されて、

「歎異抄は腸詰のように、段々と体験によつて生きた言葉となるものだが、この歌は、年頭仏前に坐した時の心中を述べたものである。ことに本抄の第七章、念仏者は無碍の一道なり」の全文が自分の体験として読めるようになった。身にもつ障りがあるまゝ、障りでなくなる。罪惡も業報を感じることもあたわず、諸善もおよぶことなき故に云々、のたのもしさである……」

と言われた次に、

「人間のよき理解者であるゲエテは、のがれられぬ苦惱から逃げようとしたり、まだ来もせぬことを取越し苦勞しては、吾々に二重三重の重荷となるから、それを待つていと受けとめることが大切と云い、又力の宗教を説いたニイチエは今一歩積極的に、苦勞はわが望むところであると、敢然それに立ちむかえ、と教えている。

とある。第五章には、父母孝養の道もむつかしい煩惱具足の身でありながら、

「ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば六道四生のあいだ、いずれの業苦に沈めりとも、神道方便をもて、まず有縁を度すべきなり」とある。

この本願をきき「他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけり」といただく時、罪障も、無常の嵐も自然に衆禍波転せられて、明日への不滅の光が射しそめるのである。

私共は常識的に、死の問題は外において、唯立派に生きる道を教えられるのが宗教であると、現世利益だけを求めがちであるが、これだけでは所謂「世渡り仏法」になつて、やがて行き詰つてしまう。仏法の真面目は、生死を出ずることにある。その道は我等凡愚人が自分の力で果たし得る道ではないが、本願の大船に乗せていただく時、生死のほてしない苦海を横ざまに越えて、成仏への白道がひらけるのである。

釈尊の御遺言とも云われる阿弥陀經に「われこの利を見るが故にこの言を説く」と仰言つてゐる。仰ぐべく、信ずべし、である。

そうしたことはすぐれた、勇ましいことではあるが、待つてゐるとか、望むところであると云う風に業苦と対決する態度には限度がある。念仏無碍の一道のたのもしさに、さもあらばあれと、受けて越える道には行き詰りは無い、最も力強い歩みである。不死身といつてよいのか、のれんに腕押しでは、業苦の方が力抜けしてしまふ」と仰言つた。

また、夫婦じゃ、親子じゃ、兄弟・親友じゃと云つていても、所詮は夢のうちの睦びである。

散る桜、散る桜、のこる桜も散る桜

と古人も警告している。こうした世にあつて、念仏無碍の有り難さには、今生夢のうちのちぎりをしるべとして、来生さとりのでのえに、しを結ばせて下さる。そこに死を越えて往生成仏のさとりが保証せられるのである。

歎異抄の第四章に、自分の力をもととした人間の慈悲は行き詰ることを説かれたあとに、

「浄土の慈悲というは念仏していそぎ仏になりて大慈大悲心をもて思うがごとく衆生を利益するをいうべきなり……しかれば念仏申すのみぞ未通りたる大慈悲心にて候うべき」

ゲエテは死後に光明を持たない人生は空しい、と云つてゐるが、仏界浄土がわからぬ、本当にそこに往生出来るであらうか、という質問が多い。

それは、英雄にして英雄を知り、子を持つてはじめて親の恩も知れる。仏界浄土は、仏と同じ無限の智慧と無窮の慈悲があれば丁々と手掌を見るように知ることが出来るが煩惱に覆われた相対有限の力ではそれは不可能である。いただいた信心の智慧によつては、のがれにうかがえる世界である。七里和上の語録に「或青年がお浄土は本当にありますか」とお尋ねした時「この世が確かと思つてゐる時お浄土は夢の様に思えるが、この世が夢と知られる時、浄土は厳然とあらわれる」というお返事であつた。

我々が一番たしかなことは、現在弥陀の弘誓の船に乗せて頂いていれば、船の力で間違ひなく浄土に導き入れていただけるということである、盛岡の妙好人の凡禿居士は大願の船はあはてる要はなし、風のまに／＼浪のまにまに

と最後の病床で讀んでいる。



御名ひとつを祝ぎごととして、年頭の賀辞とさせていただきます。池山先生は、

歳旦をますおとする念仏かな

と、ことあたらしくおよろこびになりました。又、

念仏でます、ごさばや三ヶ日

とも詠じられました。極く自然に先生のお口からお念仏がもれて、清香を放っておられました。

私も正月に八十を迎えまして、六十七で浄土に還えられた先生をしきりにお偲び申しております。

○

近角先生が真宗中興の祖、蓮如上人の御勸めを克明に御病中に口伝されました原稿をいただきました。仏法は沢山覚えることでなく、かなめを聞けとも蓮如上人は繰り返されました。

福島先生は善財童子の求道を御自身のよい導きとしていられました。文殊菩薩に善財は手をひかれましたが、私共はお念仏をともしびとして頂いておりますことを有難く思います。

酒井師は御晩年腎臓病で難儀せられました

が、そうした中にいよく常照の心光を渴仰せられました。

佐々木徹真様は、酒井先生に師事してられ、京都では足利浄円先生や白井成允先生に親炙されました。自照の発行にお病気になるまで尽力して下さった方です。

井上先生は白井先生の信界をひらいてお味わい下しました。温容の中にかく見おとし勝な白井先生のキビシさをお述べ下さり、思わず襟を正されました。

西元先生の日誌抄は、京都の百華苑出版の信仰書に言葉をやらせて「他力の信心」をお書きになった中の前文をいただきました。「釈迦弥陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し我等無上の信心を發起せしめ給ひけり」の御和讃を実際の上にお誌下さいました。御希望の方は直接百華苑にお注文下さい。

明日への不滅の希望は某病院からのお求めに応じたものであります。明日への望みを失う時、生ける屍となりますが、我々の勝手な希望は必ず崩壊しますが、仏より頂くともしびは不滅であります。これなくしては人生は危いものであります。

○

御心配ばかりおかけしております私の宿痾又々多少思白くないところがあるとのことで近く入院かと思っています。唯主治医におま

かせております。一月第三日曜も休ませて頂かねばならぬかも知れません。御賢察下さ

尚一月十五日から地番が変更します故御注意下さいますように。(駄上一丁目十四・二十九)であります。

又、誌代は成るべく一年分位にして頂きたう存じます。自分の身体に自信がもてなくなりましたので、あまり先々まで頂くと心配しますから、

定価 半年 八〇〇円(送共)
一年 一六〇〇円(送共)

編集・発行人 花田正夫
電話 八二一〇七・〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人 坂部光雄

発行所 慈光社

振替口座 名古屋六二〇四七〇番
郵便番号 四五七

慈光 第三十六巻第一号 昭和五十九年一月十五日発行 (毎月一回・十五日発行)
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

顕性